

(2)なぜ、ホクレア号は沖縄、日本を目指したのか？-ハワイ王国と大日本帝国-

日本レクリエーションカヌー協会理事 内田 正洋

(司会)

次は、日本にホクレア号を呼ぶときのキーパーソンでありました内田正洋さんからご講演いただきたいと思います。

内田さんは、長崎県生まれ、海洋ジャーナリストとして大変有名な方です。内田さんは、1982年から1991年まで、いわゆるパリ・ダカールというラリーの選手でもあり、その後、今度は海に行きまして、日本のシーカヤックの先駆けとなる活動をしてこられました。現在、東京海洋大学の講師であり、カヤックなどを教えられていると聞いております。カヤックに関する本もたくさん出されている日本の代表的な海洋ジャーナリストであり、カヤッカーでもあります。ホクレア号を日本に呼ぶときのキーパーソンの一人でありまして、今日は、内田さんから見たホクレア号についてお話しただけると聞いております。では、よろしくお願いいたします。

(内田正洋)

こんにちは。今日の話は20分しかできないので、かなりまとめますが、テーマは、「なぜ、ホクレア号は沖縄、日本を目指したのか？」です。これには、ハワイ王国という消えた国と大日本帝国という、今は日本国ですが、ちょっと変わった国の関係があります。

この写真は、ホクレア号が2007年に来たとき、宮島の厳島神社に行く途中に撮影したものです。手前の船は打瀬船(うたせぶね)という日本の伝統的な漁船です。セーリングの漁船です。昭和30年代

半ばぐらいまではまだ瀬戸内海で活躍してしまして、かつては、この打瀬船を使ってアメリカ大陸までパスポートを持たずに行った人も結構いました。ある意味、日本のセーリングカヌーの最終形です。これは復元された内海丸で、ホクレア号が来たので一緒に併走したときの写真です。内海丸は今や陸に上がっていますが、次の打瀬船をつくろうというプロジェクトも今、山口県で始まっています。

ホクレア号とハワイ人ということですが、私の祖母は、ハワイ王国だった時代のハワイで生まれています。日系人というのは、1970年代まではハワイで最も人口が多い人たちでした。私のひいおばあさんはハワイ移民ですが、ハワイ移民を受け入れ始めた理由が、先ほどのフラの時から出ていましたが、カラカウアという最後の王様が、日本に初めて来た外国の元首なのですが、1875年に日本の海軍の練習船「筑波」がサンフランシスコまで行った時にハワイに寄って、カラカウア王と会っていたんです。そのときにカラカウア王が何と言ったかということ、我々ハワイ人とあなたたち日本人は祖先が同じである。だから、



ホクレア号と布系人

布哇系日本人

ハワイは、かつて「布哇」と表記していました。日系人は日本から布哇へ移住した人たちですが、布哇で生まれ、後に来日した日系人の子孫もいます。いふなれば布系日本人。そういう視点も重要です。



琉球と布哇

琉球王国と布哇王国。この対比も重要です。琉球人は日本人ではないのでしょうか？
琉球のカヌー「サバニ」は、和船と同じ技術が使われています。布哇のサンパンSampanも和船からの技術。



移民を受け入れたいと。練習船が日本に帰った 6 年後ぐらいにカラカウア王が日本に来て、明治天皇に内緒で会っています。天皇家とハワイ王家の婚姻関係をつくりたいとってプリンセス・カイウラニの話を持ち掛けます。その後、カラカウア王は世界一周して戻りますが、明治政府はハワイ王家と天皇家の婚姻は断ります。そのときに日布——ハワイは昔、「布哇」という字を当てたんですが——の移民条約を結んで、それから 3 万人ぐらいの日本の移民たちがハワイにどんどん行きます。このハワイに行った日本人たちがハワイの文化を継続させてくれたという意味合いがあります。それで、ホクレア号は 1999 年にラパ・ヌイ（イースター島）まで行って、ポリネシア全域の航海が終わった後、次は日本を目指そうという話が始まりました。

琉球と布哇とありますけれども、ハワイでは「オキナワン」と言って沖縄と日本とは別なんです。琉球の人たちがハワイに来たのは 1900 年ぐらいで、ちょっと後です。ハワイに非常になじんで広がっています。ハワイ王国は 1900 年にアメリカ側に乗っ取られるわけですが、琉球も同じように、イメージ的に日本に取られてしまったような歴史があります。

沖縄の海洋文化を海側から見ると、日本人と沖縄の人はどこが違うのだろうとずっと僕は感じていました。サバニは、今は構造船のサバニですけども、もともとは丸木船です。構造船になったときの技術というのはほとんど和船と一緒にです。先ほどの打瀬船の帆もサバニと同じで、構造的にはほとんど和船です。シルエットはちょっと違いますが、サバニのほうがよりスピードが出るんです。ですから、サバニは進化したカヌー文化の最終形です。

ハワイと琉球の比較をすると、非常に似ている気はします。ホクレア号がラパ・ヌイに行く直前、1998 年に船長のナイノア・トンプソンさんが我が家に来たときに、日本に行

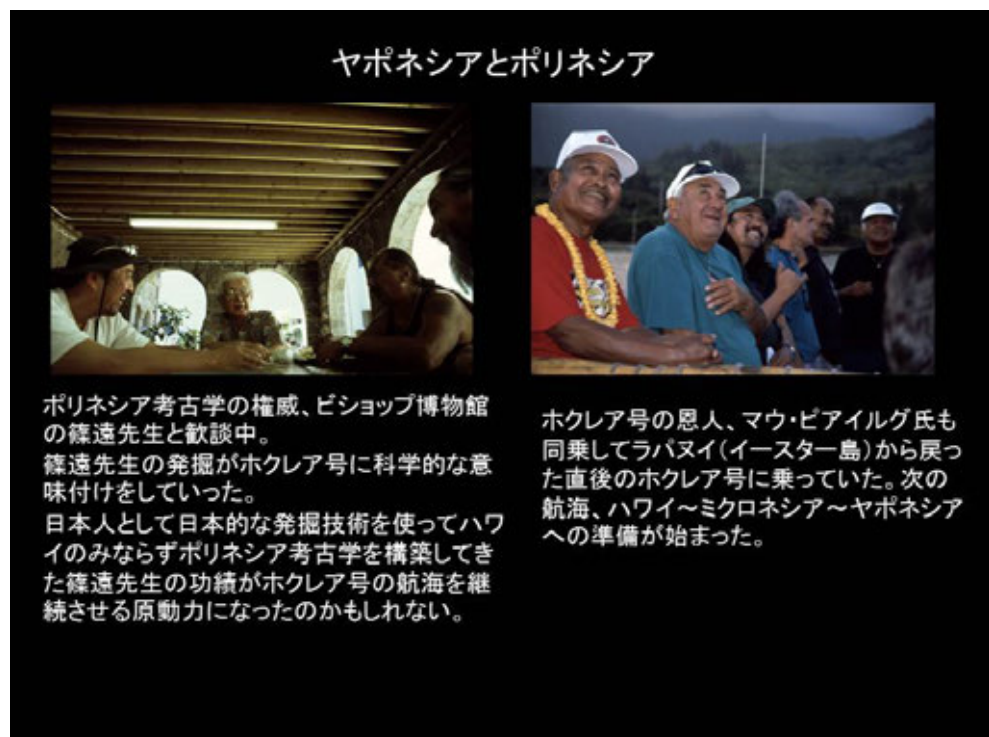


きたいと。それは、お父さんのピンキー・トンプソンさんに、いかにハワイで日本人がハワイ人を助けてくれたか。それに感謝しなければいけないと言われたと。それで、「日本に行ってもいいかな」みたいな言い方をされて、「いいんじゃないですか」と。日本にはものすごく長いカヌーの文化があるけれども、実は日本人が知らないんだよねという話になり、2000年にラパ・ヌイから帰ってきたときに、僕はハワイまで行って、ホクレア号の動きをずっとレポートしながら、自分もホクレア号に乗ったりしながら

つき合っ、結局、日本に来たのは2007年ですから、9年後です。

右下の写真はニック加藤さんとタイガー・エスベリさんです。左は日本人で、右はハワイ人です。タイガーは元ホクレア号のクルーで2006年に亡くなりましたが、この2人はハワイと日本をつなぐ人たちで、タイガーは鎌倉に住んでおり、ニックのほうはハワイ島に住んでいます。そういう2人が、僕がやっているナイノアたちとの計画をサポートしてくれました。左に今日も会場に来ているカワイ君も映っていますが、ホクレア号を州内で動かしたりするのもつき合っていて、9年間という長い時間をかけて日本の中でホクレア号の話を広げていったわけです。

その根っこにあるのが「ヤポネシア」という言葉です。左の写真は、タイガーとニックと私とビショップ博物館の篠遠喜彦先生です。篠遠先生がホクレア号の学術的な背景を発掘してくれたのですが、篠遠先生に続く京大の片山一道先生が師事したのが、「ヤポネシア」という言葉をつくった島尾敏雄さんという作家です。奄美大島に住んでいて、島尾さんに



片山先生は弟子入りしに行ったのですが、君は人類学のほうに行ったほうが良いと言われて、霊長類研究所にいらっしゃったんですが、島尾さんが言っていたヤポネシアというのが、1970年代に西日本新聞がキャンペーンをやって有名な言葉になりました。

これは日本を海から見た言葉で、島尾さんが当時言っていたヤポネシアというのは、今の日本ではなくて、北は千島列島から南は琉球弧を含め、さらにグアムの方まで、いわゆる昔の日本の南洋庁の世界まで含めてヤポネシアと呼んでいたんです。それこそ極北に近いところから熱帯まである概念がヤポネシアで、ヤポネシアの隣にミクロネシアがあり、ポリネシアがあり、メラネシアがあり、インドネシアもあるという、海からの視点で当時の考えをいろいろ打ち出してきたんです。それを僕なんかは中学生ぐらいだったので覚えていまして、それで盛んにヤポネシア、ヤポネシアという言い方をしているんです。

右の写真は、ラパ・ヌイから帰ってきたときですが、パパ・マウも乗って、タイガーも奥にいますが、僕もそれに乗せられて、次は日本を目指すぞという話だったのです。カラカウア王の「祖先を同じくする」という言葉が僕は非常に心に残っていて、それを実際にカヌーでつなげば、確かに根っこは一緒だろうと。さっき片桐さんが言っていた3万年前の航海という途方もない実験が今行われていますが、そこに根っこがあつて、これから我々ヤポネシア人は、もっと概念を広く持って、空間の移動だけではなくて歴史的・時間的な旅も含めて海を研究する人材を育てなければいけないということで、今、東京海洋大学や横浜国立大学、横浜市立大学、神奈川大学でもそういうことを教えていますが、現在の日本は海を忘れていているという現実があります。その辺を取り戻すには、明らかにカヌーからの視点が必要だというのが僕の考え方です。

さっき後藤先生から言われましたが、カヌーを使った教育が成果を上げているということを最後に言いたいと思います。10年ぐらいになります。東京海洋大学の学生たちに、シーカヤックを使って、文化的な面から、それから実践の実技からやるんですが、わずか5日間ぐらいの集中授業で学生たちがごろっと変わるんです。横浜国立大学とか市立大学でも学生が同じように変わるんです。この授業は、東京海洋大学の場合は40人しか受け入れられないので、抽選になります。今年は受ける前に論文を書かせました。そうやって選考しないとどんどん学生が来るので、申し訳ないんですが、5日間で彼らがごろっと変わるということが今の日本には全く抜けていたというのがわかってきて、これが今広がりつつあります。

ホクレア号が日本に来た2007年の後、大震災があり、津波も起こりました。津波も海から来るわけですが、そういうところも含めて、カヌーを使った海の教育、これが一番日本の環境教育の視点だろうなど。ホクレア号が日本に来た理由はハワイからの感謝でしたが、あれから9年ぐらいたちますから、今度は我々がハワイを含めたポリネシアに感謝を返さなければいけない。感謝のし合いを永遠に続けていけるような環境を今生きている我々がつくっておけば、次の世代につながっていくだろうというところで、話を終わりたいと思います。ありがとうございました。